令和７年度

入 学 試 験 問 題

第２回

国　　語

1　問題用紙は監督者（かんとくしゃ）の指示があるまでは開いてはいけません。

2　開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。

3　答えはすべて解答用紙に記入して下さい。

4　記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点（くとうてん）や符号（ふごう）は一字として数えるものとします。

5　問題は１ページから16ページまであります。

受験番号		氏名	

森村学園中等部

一　次の文章1・文章2を読み、あとの問いに答えなさい。

文章1

a本や新聞などの印刷物は、発行者である出版社や新聞社が責任を持って発行しています。原稿を書いた著者や記事を書いた記者も責任の一端を担っています。また出版社や新聞社には、校正*もしくは校閲部*といった専門の部署があり、技術と経験のある担当者が、文字や表記、そして文章や記事を校正、もしくは校閲しています。

そのようなプロセスを経て、誤字脱字はもとより、内容の真偽や論理の矛盾などのチェックを受けたのちに発行されます。「確かな情報」の一つの形といってよいでしょう。

しかも本や新聞は、発行後に誤りが見つかると、正誤表を印刷して折り込んだり、紙面に訂正やお詫びを出したり、ときには謝罪広告を出したり、状況によっては会見などをする場合もあります。

これに対して、b個人が発するネット情報はどうでしょうか。本や新聞と違い、多くの場合、第三者のチェックを受けることはないでしょう。誰でも自由に発言でき、かつ意見の交換ができるという観点では、喜ばしい利点を持ったネット（情報）ですが、誤字脱字どころか内容そのものが間違っていても訂正はされず、間違った情報のまま瞬時に世界中に向けて発信されてしまう恐ろしさがあります。ましてや拡散されてしまったら、取り返しがつきません。

かといって、たとえば「基準を設けて、ネットで発信できる者を限定する」ような規制をかけてしまうと、せっかくの①「表現する自由」を損ねてしまいます。本や新聞ならば、何段階かに分かれたチェック機能があるので、間違いや矛盾を訂正することができますが、個人が発するネット情報にはそうした機能はほとんどありません。そのためネットは、確かな情報と不確かな情報を含んだ「ごった煮状態」となっています。

②正しい情報ばかりではなく、なぜ信憑性*のない情報までもが広がってしまうのでしょうか。

一つの例から考えていきましょう。コロナ禍の初期に「トイレットペーパーが買えなくなる」という誤った情報が流れたことがありました。覚えている人も多いのではないでしょうか。その情報は瞬く間にＳＮＳ等で拡散され、多くの人が買いだめに走った結果、お店から姿が消え、しばらくの間、入手が困難になりました。

混乱の原因を見ていきます。トイレットペーパーは、生活必需品です。これは私の推測ですが、おそらく人々の中に「なくなったら大変だ」という不安が生まれたのではないでしょうか。その気持ちが、やがて「入手できなくなるのでは？」という心配に変わったのだと考えられます。それを誰かが立ち話やＳＮＳ等で発したところ、受け取った人々が次々に拡散し、「買えなくなる」という誤解が広まったのでしょ

う。まだネットが無かった*1970年代のオイルショック時にも、当時はほとんど口コミ（人づて）という伝達手段しかなかったにもかかわらず、日本中で同じような現象が起きました。

しかもコロナ禍や災害時のような不安な状況下では、根拠（こんきょ）のないうわさ（流言）がさらに拡散しやすくなります。

こうした状況は、どんな要素によって生じるかの法則化を試みたのが、アメリカの心理学者オルポートとポストマンです。彼（かれ）らは、③「流言の量（どれだけ飛び交うか）」は、「その当事者にとっての重要さ」と「あいまいさ」の積（掛け算（ざん）した値）に比例すると考えました。それを式に表したのが、以下のものです。

R（流言の量）　～　i（重要さ）　×　a（あいまいさ）

ニョロリとした記号（～）は「比例する」という意味で、ここでは「流言の量は、その『重要さ』と『あいまいさ』を掛け算した値が大きければ多くなり、小さければ少なくなる」ということになります。つまり、トイレットペーパーのような生活必需品の場合は「重要」で、しかも入荷の見込みが分からない「あいまい」な状況下では、両方の要素が掛け合わさって、流言が増えてしまうのです。

反対に、緊急性（きんきゅうせい）がなくトイレットペーパーほど重要ではない品物の場合、あるいは安定的に入荷情報が明示されている（あいまいさが低い）場合には、流言の量は減ることになります。二つの要素の「足し算」ではなく「掛け算」であることがポイントで、もしも［　I　］、流言は全く流れなくなるわけです。

この式は一つの考え方であり、数学や物理学の法則のように絶対的なものではありません。しかし、「重要さ」と「あいまいさ」が掛け合わさって流言の量が増えてしまうことは、多くの人が実感できるでしょう。

［　A　］、同じくアメリカの心理学者であるコーラスは、④この式に「批判的能力」というもう一つの要素を加えました。

R（流言の量）　～　i（重要さ）　×　a（あいまいさ）　×　1／c（批判的能力）

「批判的能力」とは、物事を鵜呑（うの）みにせず「本当かな？」と確かめて判断できる力を指します。この式によれば、批判的能力が高い人々の間では流言の量は少なくなり（批判的能力が2倍になれば、流言量は半分になる）、逆に低い人々の間では増大する（批判的能力が半分になれば、流言量は2倍になる）わけです。

［　B　］、流言の拡散を防ぐには、また加担しないためには、「それって本当かな？」とまず疑問を持つことが大切です。

さらに「そもそも、トイレットペーパーはどこで作られているのか？　国内でほとんど生産をしているならば、コロナによって輸入できない、といったことはないのではないか？　だったら、流通がちゃんと回れば、手にすることは難しくないぞ」というように具体的かつ論理的に考え、必要に応じて確かな情報を収集していけば、誤解や嘘（うそ）を見破ることができます（たとえば税関のサイトでは、輸入統計が公開されて

います。また当時、経済産業省からのトイレットペーパーに係るメッセージが出されましたが、関連する省庁のサイトや統計をチェックしてみてもいいでしょう)。この力こそが、情報リテラシーです(それでもトイレットペーパーの件は、現実には手に入らないので、とても困りましたね……)。

C 厄介なことに、コロナ禍のような緊急事態や、地震などの災害時は「知らない人に教えてあげよう」「困っている人を助けたい。この情報を多くの人に届けなければ!」という善意が、ときに流言を広める原動力になってしまいます。必ずしも悪意だけが拡散の原因ではないのです。

だからこそ、情報リテラシーを持つ必要があるのです。特に根拠不明な情報が流れてきたさいには、繰り返しになりますが、立ち止まって、冷静に考える習慣を身につけましょう。そして、裏付けとなる一次情報を探っていくようにしましょう。そうすることで、その情報は確かなものなのか、そうでないのか、また発信者に悪意があるか否か、拡散する意味が本当にあるのか、を判断する力がついていきます。一人一人にその力が備われば、誤った情報は簡単には拡散しなくなります。

(梅澤貴典『ネット情報におぼれない学び方』より)

文章2

新型コロナウイルスの拡大初期にトイレットペーパーが品薄になったのは、「店頭から無くなる」とのデマが原因ではなく、むしろデマに注意を呼びかける情報がSNSで広まったため、らしい。450万件のツイッターの投稿を分析した東京大などのグループが、科学誌「プロスワン」で発表した。

鳥海不二夫教授(計算社会科学、http://syrinx.q.t.u-tokyo.ac.jp/)らは、コロナ禍による品薄のうわさが広がった2020年2~3月に投稿された、「トイレットペーパー」などの単語を含むツイート(投稿)を収集。リツイート(拡散)された回数が多い約1900件について内容をチェックし、誤った情報で買いだめを助長する「誤報ツイート」▽誤報に反論する「訂正ツイート」▽実際に売り切れが起きていることを知らせる「売り切れツイート」など、五つに分類した。

誤報ツイートが拡散された回数は、計582回。一方で訂正ツイートは、その600倍超にあたる35万7千回も拡散されていた。売り切れツイートは7万3千回だった。閲覧された回数も、訂正ツイートのほうが誤報ツイートより推定で460倍多かった。

供給不足に関する「デマ」の存在を知った人が、自分はそれを信じなくても、「他人は信じるかもしれない」と心配して買いだめに走るケースが多かったとみられる。

（朝日新聞　二〇二二年五月一四日　朝日新聞デジタル「コロナ禍のトイレットペーパー不足　本当の原因、ツイッターを分析」より）

※　問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

（注）＊　校正……原稿と照らし合わせて誤りがないか、誤字脱字などのミスがないかを確認し、修正を入れること。

＊　校閲……表現の統一性や事実関係、内容の適切性などを確認し、訂正すること。

＊　信憑性……言説、証言、うわさなどの情報が、どれくらい信じられるかという度合い。

＊　１９７０年代のオイルショック……石油不足と石油の価格の急上昇のこと。その影響は紙製品の値上げにつながり、トイレットペーパーが手に入りにくくなるかもしれないというわさが出回った。

問一　――――a「本や新聞などの印刷物」と――――b「個人が発するネット情報」について、筆者はどのように比較していますか。その説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　本や新聞は発行前に何度も校正が入るので情報が正確だが、ネット情報は発信者が見直しをする機会を得ないため情報に誤りが含まれる可能性がある。

イ　本や新聞は技術と経験のあるプロが確かな情報を発信するが、ネット情報は経験の乏しい一般人による情報発信となるため信頼性は低い。

ウ　本や新聞は著者の他にも複数の目で内容の真偽や矛盾の有無を検証できるが、ネット情報は発信者がそれらを全て個人で行うためにミスが生じやすい。

エ　本や新聞は責任の所在が明確で誤りも正される傾向があるが、ネット情報は発信者の特定が難しいため誤りがあったとしても誰も訂正しない。

問二　――――①『表現する自由』とありますが、それはどのようなことですか。具体的に述べている部分を、「――――こと。」につながる形で本文中より二十五字で求め、最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。

問三 ――②「正しい情報ばかりではなく、なぜ信憑性のない情報までもが広がってしまうのでしょうか」とありますが、この疑問に対する答えとして、**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 暮らしに関わる内容や人々の関心がある重要度の高い事柄は、信憑性がなくても広がる傾向があるから。

イ インターネットの普及による情報量の爆発的な増加に、正誤をチェックする人々の作業が追いつかないから。

ウ 社会が混乱していたり人々が不安な状況にあったりすると、根拠のない話でも広まることがあるから。

エ 流れてくる情報の正確性がわからず先の見通しが立たない状況下では、情報の拡散が起こりやすくなるから。

問四 ――③「『流言の量（どれだけ飛び交うか）』は、『その当事者にとっての重要さ』と『あいまいさ』の積（掛け算した値）に比例する」という考え方について、本文のトイレットペーパーの例と本文以外の例を左のように表にまとめました。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

	本文の例	本文以外の例①	本文以外の例②
背景 流言の内容	二〇二〇年コロナ禍 「トイレットペーパーが買えなくなる」	二〇一一年東日本大震災 「うがい薬を飲むと放射能から体を守ることができる」	二〇一六年熊本地震 「動物園からライオンが逃げた（ライオンの画像付き）」
「R」（流言の量）	非常に多い →全国的に品薄	[あ] →一部地域で品薄	非常に多い →問い合わせが殺到
「i」（重要さ）	トイレットペーパーは生活必需品であるため重要度が高い。	放射能から身を守ることは生命に関わる問題であるため重要度が高い。	[い]ため重要度が高い。
「a」（あいまいさ）	トイレットペーパーの入荷の見込みが分からなかった。	当初混乱があったが、すぐに専門家がうがい薬の摂取は放射能被害の予防効果がなく、健康被害も起こるという正しい情報を発信した。	サーバーがダウンしたことで、ライオンは逃げ出していないという動物園からの正しい情報の発信が遅れた。

(1) [あ]に当てはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 非常に多い　**イ** 多い　**ウ** 非常に少ない　**エ** 全くない

(2) 表を参考にしながら、[い]に入る言葉を自分で考えて答えなさい。

問五 [I] に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 両方の要素とも一定量に満たなければ　　**イ** 両方の要素が同じならば

ウ どちらかの要素が少なければ　　**エ** どちらかの要素がゼロならば

問六 [A] ～ [C] に当てはまる語として、適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり　　**イ** たとえば　　**ウ** では　　**エ** ところが　　**オ** ところで　　**カ** さらに

問七 ――④「この式に『批判的能力』というもう一つの要素を加えました」とありますが、ここで筆者がこの要素を加えた式を紹介しているのはなぜだと考えられますか。その意図として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「批判的能力」を持つ人と持たない人とでは、情報に惑わされる確率が明らかに異なることを証明するため。

イ 「批判的能力」とは情報を鵜呑みにせず考える力で、それがＳＮＳ社会に必要な力であることを強調するため。

ウ 「批判的能力」をおのおのが身に付けられれば、社会を惑わせる流言の量を大幅に減らせることを示すため。

エ 「批判的能力」の重要性が認められるようになり、この能力を身に付けている人が増えたことを表すため。

問八 流言の拡散を防ぐ「対策」として、何が必要だと**文章1**の筆者は述べていますか。それを端的に述べている言葉を**文章1**の本文中より十字以内で求め、ぬき出して答えなさい。

問九 **文章2**ではトイレットペーパーの品薄はなぜ起きたと書かれていますか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問十 **文章1・文章2**について、共通する内容として**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア インターネットのない時代であれば、買い占めのような社会的な問題は起こらなかった。

イ ＳＮＳなどによる、トイレットペーパーに関する情報の拡散が品薄のきっかけとなっている。

ウ 悪意のあるネット情報の拡散だけが、社会の混乱を招く原因であったとは言い切れない。

エ 人々が実際にトイレットペーパーを購入するに至った心理には、不安や心配があった。

二　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「ぼく」（ゆうちゃん・小学三年生）と姉（ひろちゃん・小学六年生）は、三年前の二月に母を亡くした。それ以来、死者がこの世に帰ってくると言われる八月のお盆の時期には、母方の祖母が「ぼく」たちの暮らす家を訪れている。姉弟の父は三月に再婚し、新たに母親となった真由美さんを二人は「ママ」と呼んでいる。以下は、祖母が「ぼく」たちの家に滞在しているお盆の間に、姉が「ぼく」に母の夢を見た話をする場面である。

場面1

姉は自分の部屋にパジャマを取りに来たついでに、ぼくの部屋に顔を出して言った。

「わたし、わかった。お母さん、いまウチに帰ってきてる、絶対に」

昨日は「もしも」の話だったのに。

「ゆうべ、夢を見たんだよね、お母さんの」

ぼくと同じだ。だが、姉が見た母の姿は、ぼくの夢よりもずっとくっきりとしていた。夢に出てくる場面も多かった。

「ぜんぶ、実際にあったことばかりだったんだよね。自分では忘れてた話も、夢で見て思いだしたりして」

あのときのお母さんだ、このときのお母さんは確かにこんな服を着ていた、とすぐにわかる。幼い頃の姉自身も夢の中にいた。母に甘えて、はしゃいで、幸せいっぱいだった。

目が覚めたとき、まだ外は暗かった。最初は楽しい夢の余韻にひたっていたが、寝返りを打ったはずみに、急に悲しみが湧いてきた。涙があふれ出て、止まらない。

「お母さん、ウチに帰りたかったのに、帰れなかったんだよね……」

一年も続いた最後の入院中、母は外泊許可をもらってウチに帰るのが唯一の楽しみだったらしい。体調が特に良いときを見計らって、最初は月に一度、帰れた。だが、それが二ヶ月に一度になり、三ヶ月に一度になって、後半の半年は外泊どころか、姉の書いた〈はやくよくなってね〉のカードを飾っていた病室から、最も容態の悪化した患者の専用フロアに移され、そのまま元のフロアへは戻れずに息を引き取ったのだ。

「ずっと帰りたくて帰りたくてしかたなかったウチに、お盆のときだけ、帰れるんだよ」

「……うん」

「でも、今年からはママがいるんだよね、ウチには」

「ママがいたら、帰れなくなるの？」
「わかんない。わかんないけど、お母さん、もう帰ってこないかもしれない」
「ママがいるから？」
「わかんないって言ってるじゃん、ばか」
①もっと早く気づいていればよかった、と姉は悔やんでいた。
「だって、去年のお盆や、おととしのお盆にも、お母さん、ウチに帰ってきてたんだよ。わたしが信じてなかっただけで、ほんとうは、ちゃーんと帰ってたんだよ」
お母さんお帰りなさい、と心の中で言って迎えてあげればよかった。お盆の間、声に出さずに何度でも話しかけてあげればよかった。送り火のときもすぐに家の中に入ってしまうのではなく、*オガラが燃え尽きるまで外にいて、しっかり見送ってあげればよかった。お母さんまたね、また来年帰ってきてね、と誰にもわからないように手を振ってあげればよかった。
姉の声は涙交じりになっていた。手に持っていたパジャマを顔に押し当てて涙を拭う。
「わたし、やっぱり、お母さんがいい。ママよりも、お母さんのほうが好き、絶対に、大大大好き」
それを聞いて、今度はぼくが目に涙を浮かべた。ママがかわいそうになった。ぼくは、ママのほうが、お母さんよりも――。
②思いかけて、やめた。
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、と心の中で母に謝った。
だが、許してくれる母の笑顔は、どんなにしても浮かんでこなかった。

場面2

その夜は夢を見なかった。見たのかもしれないが、翌朝起きたときには忘れていた。
姉はまた母の夢を見たらしい。朝ごはんのあと、そばに祖母とぼくしかいないときに教えてくれた。ゆうべの夢もとてもくっきりしていて、母は幼い姉にとても優しくしてくれた、という。
ただし、姉は「ほんとだよ、ほんと」と何度も念を［　I　］。だから、かえって、ちょっとだけ、嘘っぽく感じられた。
「ゆう、あんたは？」
「……見なかった」
姉は、ふうん、と拍子抜けしたようにうなずいた。
「じゃあ、おばあちゃんは？　お母さんの夢、見なかった？」

祖母は苦笑して「見とらん」と言った。「ひろちゃんがうらやましいわ。おばあちゃん、夢も思うようには見られん」
あてがはずれた姉はムッとしてしまった。
「おばあちゃん、嘘つき。見てるくせに」
「嘘なんてついとらん」
祖母は笑顔で首を横に振る。
姉は口を［　Ⅱ　］、*精霊棚をにらむように見つめ、そのままの顔の向きで祖母に訊いた。
「お母さん、いま、ウチに帰ってきてるんだよね？　そうだよね？」
「ほんまじゃ、ほんまに帰ってきとるんよ。お盆には、みんな帰ってくるんよ」
「来年からも？」
「うん……帰ってくる」
③祖母の声が少し揺れた。
「来年も、再来年も、その先も、ずーっと毎年、絶対に帰ってくる？」
「……うん」
声がかすれ、頬から笑みも消えた。
「ママがいるのに？」
返事が止まった。
姉は精霊棚から目を動かさずに「ママがいても、帰ってきてくれるの？」と訊いた。祖母と話していても、訊いている相手は母なのかもしれない。
姉の口が動いた。お母さん、と息だけの声で言った。祖母の耳には届いていなかったが、ぼくには聞こえた。お母さん、ずっとウチにいてよ、もうあっちに行かないでよ。姉は確かにそう言っていた。
祖母はため息をついて頬をゆるめ、もう一度笑顔になってから、言った。
「おばあちゃんがお盆に来るんは、今年で最後。来年からは、毎年二月に……ひろちゃんやゆうちゃんが忙しゅうないなら、二月に会おうな」
ぼくはびっくりして、「おばあちゃん、来年のお盆は？」と訊いた。
「田舎におる。おじいちゃんと一緒に迎え火を焚いて……お母さんが、帰ってくるけえ」
「ウチじゃなくて？」
「来年からは、お母さんの帰ってくる先が、変わるんよ。おじいちゃんとおばあちゃんのウチに帰ってくる。お母さんが子どもの頃に住ん

どった家に、帰ってくるんよ」
姉は黙って、まだ精霊棚を見つめていた。驚いた様子はない。④そうなることを最初からわかっていたのかもしれない。
ぼくは話の意味がよくわからずにきょとんとしていたが、祖母の口調から、それはいいことなんだろうな、と安堵もしていた。
「毎年はアレかもしれんけど、たまにはお盆に遊びにおいで。お母さんも帰ってきとるけえ、あんたら二人、大きぃなったところを見せてあげて」
ぼくは「うん」とうなずいて応えた。
だが、姉は不意に声をあげて笑った。
⑤「やだぁ、帰ってくるわけないって、死んだ人が。そんなの迷信だもん。いまは冗談で言ってただけ、昨日からずーっと冗談言ってんの。わかんなかった？　幽霊とか魂とか、そんなのないって、わたし知ってたよ、最初から。知ってる知ってる、そんなの世界の常識だから」
早口にまくしたてて、ぷいっと顔をそむけるように棚の前から離れた。そのまま、祖母が呼び止める間もなく、走って部屋から出て行ってしまった。

その日の夕方、いつものお手伝いで精霊棚にお膳を運んだぼくは、棚のお供え物が一つ消えていることに気づいた。
*なすびの牛がいなくなった。
⑥誰が持って行ったのか、理由はなんだったのか、見当がつくから、父にも真由美さんにも祖母にも言えない。
姉は自分の部屋で勉強をしている。いまから部屋に行って問いただしても、正直に認めてくれるとはとても思えない。

（中略）

場面3

姉は、今日の午前中は部屋にこもって宿題をして、午後からは友だちと遊びに出かけた。前から約束していたのではなく、急に思い立って仲良しの子に電話をかけて誘った。お盆休みで断られどおしのすえ、やっと一人、本屋に付き合ってくれる子が見つかったのだ。
父も祖母も真由美さんも、姉が片っ端から電話をかけるのを見ていた。話し声も聞いていた。だが、なにも言わない。出がけに父が一言
「五時に送り火を焚くから、それまでには帰ってこいよ」と声をかけただけで、姉は気のない声で「はーい」としか応えなかった。

（中略）

「お帰り」

少し離れたところに、自転車にまたがった姉がいた。姉は黙って、ブレーキのレバーから手を離し、ペダルを一漕ぎして、家の中に入った。しばらくたって、新聞紙に点けた火がオガラに燃え移った頃、玄関の引き戸が開いて、祖母と真由美さん、そして姉が連れ立って外に出てきた。

祖母はもう旅行鞄を提げている。このままバス停に向かうのだ。祖母の目は赤く潤んでいた。真由美さんはにこにこ笑っていて、姉はすねたようにうつむいていた。

「なすびの牛、ちょっと太って帰ってきたよ」

真由美さんはうれしそうに父に言った。

「ひろちゃんがな、八百屋さんで買うてきて、割り箸も貰うてきて、もういっぺん作ってくれたんよ……お母さんのために、帰ってきてくれてありがとう、言いながらな……」

祖母は話しながら、泣きだしてしまった。

姉はあいかわらずすねている。

（中略）

祖母は、バス停まで見送りに行くというのを断って、一人で歩きだした。最初のうちはぼくの「ばいばーい」の声に振り向いて手を挙げて応えてくれていたが、途中からはずっと前を向いたままで歩きつづけた。

バス停へは、ウチの前の通りをまっすぐ歩いて、三つめの角を曲がる。二つめの角を過ぎた祖母の背中はずいぶん小さくなった。もう声をかけても届かない。

オガラがまた、かすかな音をたてて爆ぜる。

ふと見ると、姉は顔を上げて、遠くの祖母を見つめていた。お別れのときには一言もしゃべらなかったのに、いまはじっと、泣きながら、祖母と――もう一人を、見送る。

ぼくもそうした。

祖母は三つめの角に差しかかる。最後の最後にこっちを向いてくれるだろうかと思っていたが、祖母はすっと、そっけないほどあっさりと角を曲がって、ぼくたちの視界から消えてしまった。

代わりに、ぼくの名前を呼ぶ声が聞こえた。誰のものかは思いだせない、けれどむしょうに懐かしい響きの声だった。

ほんの一瞬だけのことだ。聞いたそばから消し去られてしまう声でもあった。

姉と目が合った。姉も同じ声を聞いたのか、たくさん泣いたあとで美味しいケーキを食べたような顔で笑った。

「よし、燃え尽きたから、今年のお盆はこれでおしまいっ」
父が言った。真由美さんが「お風呂沸いてるから、どっちか先に入っちゃいなさい」と姉とぼくに言った。
⑦二人の声は、いつになく、くっきりと大きく耳に響いた。それに応えるぼくたちの「はーい」の声も、嘘みたいにきれいに揃った。
真由美さんもびっくりして「おーっ、さすが仲良しきょうだいだね」とほめてくれた。
姉とまた目が合った。
姉は、ぼくに「あっかんべえ」をして、真由美さんに向き直った。
「ママ、わたし先にお風呂入るね」
家の中に駆け込んだ。
「サンダルで走ったら転んじゃうよお」
苦笑交じりに姉の背中に声をかけた真由美さんは、父に「ママ、だって」と照れくさそうに言って、それから、顔を伏せて、両手で覆った。

（重松清『送り火のあとで』より）

※　問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

（注）＊送り火……お盆に帰ってきた死者の霊をあの世に送り出すために焚く火。
＊オガラ……皮をはいだ麻の茎で、お盆に死者の霊を迎えたり送ったりするために家の門の前で火を焚く際に使われる。
＊精霊棚……お盆に、死者の霊を迎えるために供え物を飾る棚。
＊なすびの牛……お盆に精霊棚に飾られる、死者があの世に帰るための乗り物に見立てた供え物。

問一　――①「もっと早く気づいていればよかった」とありますが、姉はどんなことに「気づいていればよかった」と思っているのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　死んだ母は、入院している間ずっと家に帰りたがっていたこと
イ　死んだ母は、真由美さんよりも大切にされるべきだということ
ウ　死んだ母は、言い伝えの通りお盆の間は家に帰ってきていたこと
エ　死んだ母は、来年以降はこの家に帰ってこないかもしれないこと

問二 ――②「思いかけて、やめた」とありますが、「ぼく」がそのようにしたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 実の母よりも真由美さんのほうが好きだと思うことは、病死した母をないがしろにしていることになり申し訳ないと思ったから。

イ 死んだ母の顔が思い浮かばなかったので、自分が母と真由美さんのどちらが好きかを考えることはできないと気がついたから。

ウ 姉に実の母と比べられる真由美さんよりも、家に帰りたいと思いながら亡くなった母のほうがかわいそうだと思いなおしたから。

エ 真由美さんよりも実の母のほうが好きだという姉の思いを否定して、泣いている姉に反抗することはできないと気が引けたから。

問三 (1) Ⅰ ・ Ⅱ に当てはまる語句を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

Ⅰ

ア 押す　イ 唱える　ウ 叩く　エ 改める

(2) Ⅱ

ア はさんで　イ ふるわせて　ウ すべらせて　エ とがらせて

問四 ――③「祖母の声が少し揺れた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 来年のお盆からは娘を田舎で迎えようと決めていたので、来年からもウチに帰ってくるのかという孫の問いかけにはっきり答えることがためらわれたから。

イ 孫が、死んだ娘がウチに帰ってくるかどうか何度も尋ねるので、自分自身もお盆には死者が帰ってくるという言い伝えが怪しく思えてきたから。

ウ 死んだ娘がウチに帰ってくることを孫たちは望んでいるとわかり、来年から自分の家に娘を迎えるのはやめることにしようかと迷っているから。

エ 孫がお盆の言い伝えは迷信であると気がついてしまったので、もう自分たちの母親と会えないことに絶望してしまうのではないかと心配したから。

問五 ――④「そうなること」とありますが、具体的にはどうなることですか。その説明として**適当でない**ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 来年から母が帰ってくるのは母が亡くなった二月になること

イ 祖母がお盆に「ぼく」たちの家に来るのは今年で最後になること

ウ 来年のお盆から母は子どもの頃に住んでいた家に帰ること

エ 父が再婚したので母は「ぼく」たちの家に帰ってこなくなること

問六 ――⑤『やだぁ、帰ってくるわけないって、死んだ人が。そんなの迷信だもん』とありますが、この発言の裏にある「姉」の母に対する本心が述べられている一文を場面2から三十字以内で求め、最初の八字をぬき出しなさい。

問七 ――⑥「誰が持って行ったのか、理由はなんだったのか、見当がつく」について、次の問いに答えなさい。

(1) 持って行ったのは誰だと考えられますか。本文中からぬき出しなさい。

(2) どんな理由で持って行ったと考えられますか。五十字以上六十字以内で答えなさい。

問八 ――⑦「二人の声は、いつになく、くっきりと大きく耳に響いた」とありますが、この一文によってどのようなことが表現されていますか。その内容の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」は声も思い出せないくらいに死んだ母の記憶が薄れたことを寂しく思い、二人が生きているうちに二人を大切にしようと決意したことを表現している。

イ 「ぼく」は新しい家族四人で祖母と死んだ母を見送ったことで、送り火の終わりとともに、また前と同じ日常を生きていこうと気持ちを切り替えたことを表現している。

ウ 「ぼく」はお盆の行事が無事に終わったことで母への未練がなくなって、これまでよりも二人からの声かけを素直に聞けるようになったことを表現している。

エ 「ぼく」は姉が二人を両親として暮らしていくことを受け入れられたと感じ取り、自分も改めて新しい家族の形を前向きに捉えるようになったことを表現している。

問九　この作品を読んだ生徒たちの会話文を読み、あとの問いに答えなさい。

生徒A　お盆という行事があるのは知っていたけど、なすびの牛を飾(かざ)る風習は知らなかったよ。

生徒B　私の祖母の家では、なすびの牛だけでなく、きゅうりの馬も飾っているよ。なすびの牛はあの世に戻(もど)るときの乗り物だけど、きゅうりの馬は亡くなった人がこの世に帰ってくるときの乗り物なんだって。

生徒C　なんでこの世に帰ってくるときの乗り物は牛ではなく馬なんだろう？

生徒B　［　あ　］という願いがこめられているんじゃないかな。

生徒C　なるほどね、それに対して、あの世に戻るのは「牛の歩み」で、つまりゆっくりであってほしいと願っているんだね。

生徒A　そんな工夫したって意味ないのに。亡くなった人が本当に帰ってくるわけじゃないんだからさ。

生徒B　Aさんは、お盆に亡くなった人が帰ってくるのは「迷信」だと思う？

生徒A　正直そう思う。お盆なんてやったってしかたないよ。

生徒C　しかたないってことはないんじゃない？　残された側にとっては、お盆の行事は気持ちの整理をする機会になるよ。「ひろちゃん」がそうでしょう。

生徒B　「ひろちゃん」は、亡くなったお母さんはこの世に帰ってきていると信じて、お母さんのことをいろいろと思い出しながらお盆を過ごしたんだね。そして最後には「なすびの牛」を作ってしっかり見送ることができた。だから、「ひろちゃん」は［　い　］表情をしたんだよ。

生徒A　そうか。お盆の行事は亡くなった人をとむらうためだけではなく、残された人のためにもあるんだね。

(1)　会話中の［　あ　］にあてはまる文を二十字以内で考えて書きなさい。

(2)　会話中の［　い　］にあてはまる部分を**場面3**から二十四字で求め、最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。

三　次の①～⑧の――部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の――部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

① 開会のセンゲンをする。
② めきめきとトウカクを現す。
③ ヨケイなことに口出しする。
④ このテレビは録画機能をナイゾウしている。
⑤ 校則を時代にコオウさせる。
⑥ ゴール前はコンセン状態である。
⑦ 祖父は散歩をニッカとする。
⑧ 弟は、まちがいを認めずイナオるところがある。
⑨ 説明を聞いて合点がいく。
⑩ 手近な本を手にとる。
⑪ 彼（かれ）は大声で口早に呼び立てた。
⑫ 発表会まで残すところあと十日です。